



#23

眠れる森の……

著：監澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

「ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ……おい今、何時だい？」
放課後、東山高校落語研究会の部室で一人、早瀬凛太郎は先週覚えたばかりの「時そば」をさらっていた。ちなみに落語研究会は凛太郎を入れても総勢2人の弱小研究会だ。

ガチャツ。

突然、部室のドアが開いた。

そこには真剣な表情で佇む女子生徒が一人。

彼女はそのままずんずんと凛太郎の目の前まで歩を進め……いきなり土下座した！

「お願いします！ あたしと一緒に寝てください！」

「えっ!？」

「じゃなかった、あたしを寝かせてください！ あたし、早瀬君じゃなきゃだめなんです！」

「ええっ!？」

土下座からの、懇願するような上目遣いの視線で、唐突な意味不明発言。

凛太郎は固まった。

というか、この状況で固まらない人間がいたら見てみたい。

「いいですか？ だめですか？ どうなんですか!？ やっぱりあたしじゃ役不足ですか!？」

「え？ え？ 一緒に寝る？ 寝かせるって……？ え、どういうこと?？」

凛太郎はうろたえながらも改めて目の前の少女を見つめた。

制服のタイが青だから、自分の一つ上の二年生だろう。

くりっとした瞳。勝ち気そうな口許。形の良い綺麗な貝殻を連想させるような「可愛い」感じの顔立ち

全体として美人、というよりはどこか小動物を想起させるような「可愛い」感じの顔立ちだった。

そして凛太郎は彼女にうつすらと見覚えがあった。

「あつ、そうだ！ 確か昨日の落語研究会の定期発表会のとき、最前列に座っていた」

「そうです！ あたしです！ 手代木真奈子16歳です！」

真奈子は食い気味に台詞を挟みこみ、膝立ちになつてずいといと凛太郎の前に顔を突き出した。

「え？ とりあえず寝かせるってどういうこと?？」

凛太郎はしどろもどろに真奈子に問いかける。

「あの時、早瀬君、落語をやってたじゃないですか!？」

「そりゃ落語研究会の発表会だから、確かに『寿限無寿限無』を演ったけど……」

「それがとてもつまらなかったんです!？」

「はあ!？」

「とつてもつまらなくて、あたしついうとうとしちゃったんです! うとうとしちゃったんです!？」

すよ！」

凜太郎は思わずムツとした。

「面と向かって自分の落語を「つまらない」と言われれば、それは凜太郎でなくてもカチンと来るはずだ。しかも真面目に落語に取り組んでいる凜太郎にすればそれはなおさらの事だ。

「だいたい爆笑とは言わないまでも、昨日の発表会のときだってそこそこ笑いはとっていたはずなのだ。」

後半「寿限無」の名前を噛みまくってダダ滑りになったのは認めるけど……。

認めるけどさ……。

「だからあの時の落語をもう一度聞かせてください！」

「ふざけんな！ 帰れよ！」

「帰りません！ あたし、真剣なんです！」

真奈子はそこでいったん凜太郎から距離をとると、すう、と深呼吸をした。

そしてその後、深く深くため息をついた。

「あたし、生まれてからのこの16年間、1回も寝たことがないんです……」

「え？」

「それがあなたの落語で初めて『うとうと』できたんです！」

「衝撃的だったんです！ もしかしたらもう少しで寝ることができたかもしれないんです……！ だから……だからもう一度

あなたの落語を聞かせてください！ お願いします！」

突然の告白に凜太郎は戸惑いを隠せなかった。

16年間眠ったことがない？ 果たしてそんなことがあり得るのだろうか……？

「あつははははー、なんか面白い人じゃん、りんばー！ 面白いからやってあげなよ、落語！」
不意に聞き覚えのある澄んだソプラノの声が部屋に響いた。

見るとそこには開いたドアに寄りかかる女子生徒の姿があった。

御厨琴音。

凜太郎の幼なじみで、もう一人の落語研究会部員である。

もっとも落語は演らないで聞く専門の、ほとんど幽霊部員だったけれど……。

「琴音!? お前いつからそこにいた!？」

「えーと、『お願いします！ あたしと一緒に寝てくださいー』の辺りっ。」

「ドアタマからいたんじゃないかよー！ もっと早く助けに入れよー！」

「だって、なんか面白い展開だったしー。りんばも狼狽えたり、怒ったり、呆然としたり、見て面白かったんだもーん」

こいつ……。幼稚園の頃から全然性格変わってねえ……。

「あたし、御厨琴音です。よろしくお願いします、先輩！」

「あ、はい、あたし手代木真奈子です。こちらこそよろしくお願いします。……あのりんばっ

てなんですか？」

「あー、こいつのこと。こいつ、昔、自分の『りんたろう』の『りんた』が言えなくてずっと『りんぱはね〜、りんぱはね〜』って言ってたんですよ」

「うわあ……それは可愛い……」

真奈子はやや頬を染め、潤んだ瞳で凜太郎を見つめた。

凜太郎は気まずそうに二人から視線を逸らす。

「その話はやめろ！ もう時効だ！」

「りんぱくん、お願いです！ あたしに落語、聞かせてください！」

「だからりんぱはやめろって言ってたんだろ！ 人の話を聞けよ！」

凜太郎はハアハアと荒く肩で息をしていた。

突っ込む相手も二人が増えて疲労感も倍増だ。

「でもさあ、手代木先輩。寝ないで済むってすごいじゃん。ある意味人生2倍じゃん？ 無理に寝ることもないんじゃない？」

「……そんなにいいもんじゃないです……」

琴音の問いかけに、さっきまでの勢いはどこにいったか真奈子はうなだれながらそう呟いた。「あたし……眠るっていうことが、どういうことか全然わかんないんです……でもみんな夜が来ると眠るでしょう？ 目をつむるでしょう？ 静かになるでしょう？ 誰も相手をしてくれ

なくなるでしょう？ お父さんもお母さんも小学校の時までは頑張って交代で起きてくれたけど、中学校にあがってから、ずーっとあたし、夜は一人なんです。外は真つ暗だし、テレビとかつけてても逆に虚しい……。地球の半分の人寝てるのに、あたし一人だけずーっと起きてるんです……」

そこまで言って真奈子はきゅつと唇を噛んだ。

「……そんなのいやです。そんなの、淋しいんです……」

「先輩……」

真奈子の瞳は涙で潤んでいた。琴音はそっと真奈子の手に、自分の手を重ねる。

「よし、判った！」

「りんぱ？」

「そこまで言うなら、俺の落語を聞かせてやる。だけど俺の落語は抱腹絶倒だからな！ 面白くて寝る暇なんかないからな！ そこんとこを肝に銘じやがれてやんでいこんちくしょうめ！」

「はい！ ありがとうございますー！」

「くー……」

真奈子は穏やかな寝息を立てて安らかに眠っていた。

今まで寝ることがない、というのが嘘のような見事な眠りっぷりだ。

「開始1分で熟睡しやがった……さすがにへこむぜ……」

凧太郎は部屋の隅でひとり体育座りをしていた。

無理もない。まだ嘶のマクラも終わらないうちに爆睡されたのだ。

「でも、りんば、いいことしたじゃない。先輩、とっても幸せそうな寝顔だよ」

「ま、いいけどさ、別に……」

凧太郎はごそごそと部屋のロッカーからタオルケットを取り出し、それをそつと真奈子にかけてやった。真奈子は幸せそうな笑顔で何やらむにやむにやと寝言を呟いていた。



「ジーザス!? 本当だ!! 本当にまなが寝ている!?!」

「あなた! 奇跡は起きたんですね!」

落語研究会の入り口で中年夫婦が感動に打ち震えていた。真奈子の両親だ。

「おおおおお、もつとその可憐な寝顔を見せておくれ、私の可愛い可愛い眠り姫よ!」

「この16年間で初めてのまなの寝顔……感動的だわ……」

真奈子の両親は彼女の枕元で異様な盛り上がりを見せている。

とりあえず眠り続ける真奈子の対処に困った凧太郎が、彼女の家に電話して両親に迎えに来てもらったのだが、なにやら想定していたのと違う展開になってきた。

「あなた! 写真! 写真とってもらいましょう! きつと一生の記念になるわ」

「お、おお、そうだな! すまん、その君、このデジカメでまなどわしらを撮ってくれないか?」

「い、いいですけど……」

凧太郎はしぶしぶとカメラを受け取ってシャッターを切った。ファインダーの向こうには、熟睡する少女とうれし涙を流しながらピースをする中年夫婦というよく判らない絵面があった。

「どうかね! 君たちも一緒に!」

満面の笑みを湛えてデジカメを差し出すお父さん。

「え、遠慮します……」

「あ、あたしは面白そうだから撮ってもらおっかな。じゃ、りんばカメラよろしく!」

「お、おい!」

止める暇もなく琴音は仲良く手代木一家の中におさまってしまっ。

しかもみんな揃って仲良くピースをしている。

「琴音などは真奈子の手をとって無理矢理ピースの形にしている。ノリノリだ。
 (……なに調子乗ってんだよ、この野郎……)」

この状況をフルに楽しんでいる琴音に若干イラッとしながら、それでも凧太郎はしぶしぶとシャッターを切った。

「おおおとおお、寝ているまなをこうして抱ける日が来ようとは……神はわしらを見捨てては
 いなかったんじゃないのう、母さん……」

「ええ……きつとこの日の喜びのために今までの苦労があったんですわ、あなた……」

真奈子を抱き、何度も何度もお辞儀をして去っていく手代木夫妻を、凧太郎は何か複雑な気分で見送った。

「いい事したね、りんばー!」

「……おまえ、遠回しに俺の落語つまらなかったって言ってるだろ?」

「えー、なんのこと? りんばは気にしすぎだよー!」

琴音はそう言っつけられ笑いながら、凧太郎の背中をばんばんと叩いたのだった。



翌朝。

「ふわあ、なんか調子出ねえ……」

凧太郎は通学路を歩きながら大あくびをした。

この時間、東山高校へ向かう道は生徒たちでいっぱいだ。

「なんつーか、変な先輩だったよな……調子狂わされたってゆーか……」

あれから家に帰っても自分の落語で寝られた口惜しさが忘れられなかった凧太郎は家でも稽古を始め、そのおかげですっかり寝るタイムングを逃して徹夜してしまったのだ。

そして学校の目の前の曲がり角に差し掛かった時。

「早瀬くん、おっはよー!」

「おわっ!」

ひととき元気良い声と同時に、凧太郎は猛烈な勢いで抱きつかれた。

「なんだなんだ?」

訳がわからず目を白黒させる凧太郎。

やがて強烈なハグから解放された彼が見たのは……

「昨日の先輩!」

ニコニコとほほ笑む真奈子その人だった!

「うーん昨晩はたっぷり寝て元気だっつー! 寝るってこんな気持ちいいことだったんだ

ねー! ありがとー、早瀬くん!」

真奈子はうーんと伸びをして、いかにも爽快そうかいそうに微笑ほほえんだ。

「ん？先輩、その食パンは？」

凧太郎は真奈子がカバンと反対の手に、かじりかけのトースト持っているのを発見した。
「そうそう！これこれ！すごいでしょう！あたし寝坊したんだよ！初めて眠って初めて寝坊できたんだよ!?すごいくない!?あたし天才じゃない!?人類初の快挙じゃない!?!」

「そ、そうっすね……」

トーストを手にニコニコと寝坊自慢をする真奈子。

その意味不明の勢いに凧太郎はちよつと気圧けおされた。

なるほど、そのパンをくわえながらその角かどまで走って来たってわけですか、先輩……。

「ねえ、早瀬くん？」

「はい？」

「もしまた眠れなくなったら、また早瀬くんの落語聞かせてくれる？」

真奈子ははにかむようにそう言った。

凧太郎は一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、やがてちよつと照れたてような表情を浮かべてこう言った。

「は、はん！昨日も言ったけど俺の落語は抱腹絶倒だから、寝る暇なんてですすからね！今度こそ本当に一晩中だつて寝かせませんからね！」

「うん！」

真奈子は嬉しそうに頷うなずいた。

(……一晩中寝かさないつて……)

凧太郎はそこで周りを歩く生徒たちの空気がおかしいことに気がついた。

(出会い頭で抱き合つて、しかも一晩中寝かさないつて……つまりそういう関係つてこと……)

(あれ、1年の早瀬だよな?)

(奥手そうに見えてもやることはやってんだな……)

(やだ、早瀬くん不潔ふけつ……)

不穏ふおんな囁ささやきがざわざわと通学路に広がっていく。

「あー、違う！違うんですよ！誤解！誤解なんです!!俺の癖を、いや話を聞いてくださーい！頼む、聞いてくれー!!」

自分の発言が思わぬ波紋はもんを広げていることに慌あわてた凧太郎は両手をばたばたと振って弁明を始める。

そしてその姿を見ながら、真奈子はまったくすりと笑みをこぼしたのだった。

おしまい